

となると考えた。今回、日本（新潟市）、中国（合肥市）、イタリア（トリノ市）、ペルー（クスコ市）で分離された *C. albicans* 株の生物型を糖利用パターンおよびキラ酵母法で調べるとともに、病原性因子とされているプロテアーゼならびにホスフォリパーゼ産生能を調べ、これらの性状を明らかにすることを試みた。

4) 増殖性の臨床所見を示した口腔カンジダ症の2例

南部 弘喜・二宮 一智（日本歯科大学
新潟歯学部口腔
外科学第二講座）
又賀 泉
久和 彰江・仲村健二郎（同
総合研究センター
R1施設）
青木 茂治

<緒言> *Candida* は口腔内の常在菌として知られており、口腔カンジダ症の起原菌として知られている。今回、我々は口腔癌術後の移植皮弁に腫瘍再発を疑わせる増殖性の病変を認め、病理組織学的検査においてカンジダ症と診断した2症例を報告する。

<症例1> 70歳 女性。1996年2月20日某病院にて左側頬粘膜腫瘍摘出術、1996年3月13日 D-P 皮弁による再建術を施行。1996年4月30日、口唇閉鎖不全、開口障害、左側口角瘢痕拘縮症、上下顎義歯不適を主訴に当科紹介来院される。1996年10月8日、移植皮弁上に腫瘍様の増殖性の病変を認めたため biopsy 施行、病理組織学的検査にてカンジダ症の診断を得た。フルコナゾール投与1週間後、症状の改善傾向を認めた。現在、経過観察中で症状の再燃を認めず。

<症例2> 63歳 女性。1986年8月ごろより左側舌側縁部に違和感を認めたが放置、1987年2月25日当院紹介来院する。1987年3月3日 biopsy 施行、扁平上皮癌の診断を得た。1987年腫瘍摘出術、広背筋皮弁による舌再建術施行。経過観察を続けていたが1997年4月9日、左側口底部粘膜と再建皮弁境界部に腫瘍様肉芽を認めた。1997年4月21日 biopsy 施行、組織学的検査にてカンジダ症の診断を得た。現在、経過観察中で症状の再燃を認めず。

<考察> 以上の2症例は、口腔内に移植皮弁を用いており、通常口腔カンジダ症とは、臨床的にも異なった所見を示した。稀な症例と考えられる。今回、病理組織学的に若干の検討を加えて発表した。

5) 喀痰から *Aspergillus species* が分離された症例についての臨床的検討

西堀 武明・牧野 真人
川崎 聡・村山 直也
塚田 弘樹・長谷川隆志
五十嵐謙一・鈴木 榮一（新潟大学）
荒川 正昭・下条 文武（第二内科）
尾崎 京子（同
附属病院検査部）

【目的と方法】 喀痰からアスペルギルスが検出された際に治療を必要とするか否かは、臨床問題となる場合も多い。

1996年から1998年まで、当院検査部細菌検査室で喀痰からアスペルギルスが分離培養された症例について基礎疾患毎に分類して検討を行った。

【結果と考察】 悪性腫瘍群は16例であり、半数以上の10例が死亡していた。膠原病や間質性肺炎の症例は20例であり、ステロイド治療を行っている症例が多く、8例が死亡していた。これらの群でアスペルギルスが検出された場合の予後は AMPH-B 等の抗真菌薬で治療していた症例も含めて不良である傾向がみられた。

また、気道病変をもつ症例は23例あり、抗真菌薬を使用する頻度は他の群と比較して少なかったが死亡例は1例のみであった。この群では、アスペルギルスが colonization している場合も多いと考えられた。

6) 眼感染症における嫌気性菌の検出状況（1995～1998年）

宮尾 益也（新潟大学眼科）
大石 正夫（白根健生病院眼科）

目的：眼感染症の原因菌の現況を知る目的で、当科で分離された嫌気性菌について検討した。

方法：1995～1998年に受診した眼感染症患者を対象とした。菌の培養、同定、薬剤感受性は中央検査部細菌検査室で行われた。

結果：94名から、109株が検出され、全検出菌の21.2%を占めた。内訳は *Propionibacterium* 90株、*Peptostreptococcus* 4株、*Prevotella* 3株、*Actinomyces*、*Fusobacterium* 各1株が同定された。

症例は60歳以上が43.6%を占め、男性39.4%、女性60.6%であった。

疾患は結膜炎34例、角膜感染症26例、涙嚢炎17例、眼瞼炎7例等であった。

嫌気性菌単独で検出されたのは全体の42.6%、なんらかの基礎疾患を有したものは78.7%であった。

薬剤感受性検査では、PCG, ABPC, FMOX, IPM, MINO, CLDM に高い感受性を示した。

7) 慢性涙嚢炎の Fosfomycin 投与によるサイトカインに及ぼす影響

大石 正夫(白根健生病院眼科)
宮尾 益也(新潟大学眼科)

【目的】慢性涙嚢炎は鼻涙管狭窄に起因する細菌性感染症で、保存的治療(点眼, 涙嚢洗浄など)により、ときに急性増悪を繰り返す難治性の症例を経験する。Fosfomycin (FOM) には抗菌作用の外に、種々の生物学的活性を有することが報告されている。今回、難治性の慢性涙嚢炎の症例に FOM を投与して、in vivo におけるサイトカインの産生に及ぼす影響について検討した。

【方法】3%耳科用 FOM 液 1 mL を涙嚢内に注入、週1乃至3回投与した。FOM 注入前、注入後に涙嚢内を生食水で洗浄し、これを検体として ELISA を用いて各種サイトカイン濃度を測定した。

予備実験として行った症例で、IL-8 は全ての検体で高濃度に検出された。IL- β は低値を示し、IL-4, TNF α は検出されなかった。よって今回は IL-8 に測定を絞って FOM の影響をみることにした。IL-8 値は検体の総蛋白質量を基準に算出した。

【結果】検体の性状で、膿性, slime (+++) のものでは IL-8 は高濃度を示した。7 症例に FOM を注入して、6 例には検体の性状の改善に伴い、IL-8 値の低下が認められて有効に作用した。のこり1例では、はじめ IL-8 は低下したが後検体の性状の悪化とともに上昇した。

これら IL-8 値の変動は、検体の性状をほぼ反映するものであった。FOM 涙嚢内注入による副作用はみられなかった。

【結論】FOM 液を涙嚢炎症例の涙嚢内に注入して、検体の性状の改善に伴い IL-8 値の低下がみとめられて、FOM による涙嚢内サイトカイン産生への影響が示された。また、慢性涙嚢炎に対する FOM 局所療法の有用性が認められた。

8) 腸管出血性大腸菌 O157 の薬剤耐性：動向と耐性メカニズム

山本 達男・種池 郁恵(新潟大学
細菌学教室)

目的：腸管出血性大腸菌は腹部症状の他に、HUS や脳症等の深刻な合併症を惹起するが、感染の初期には、化学療法が有効であると考えられている。本研究では、わが国の腸管出血性大腸菌の薬剤感受性を調査した。

材料と方法：平成8年の大流行時とそれ以降に分離された腸管出血性大腸菌を用いた。MIC は日本化学療法学会の標準法に準じて測定した。耐性遺伝子については PCR を行い、塩基配列を解析した。

結果と考察：テトラサイクリン (TC), ストレプトマイシン (SM), スルファメトキサゾール (SMX), カナマイシン, ナリジクス酸, アンピシリン, クロラムフェニコールで耐性がみいだされた。米国で報告されたウシ O157 由来の TC, SM, SMX 3 剤耐性がわが国でも確認された。耐性を示した薬剤は、家畜に使用している薬剤と一致する。米国の場合と同様で、わが国の O157 の薬剤耐性もウシ等の家畜に由来していると考えられた。

II. 特別講演

「感染症の最近のトピックス」

— エイズを中心に —

東京専売病院院長

島田 馨先生